

# オランダ国立教育博物館における教育史・資料の 収集・保存・活用

須田 将 司\*

本稿は、オランダ王国ロッテルダム市にあるオランダ国立教育博物館の事業展開を、特に教育史・資料の収集・保存・活用に着眼して紹介し、日本の現状を再考したものである。約1000の博物館があるオランダにおいて、何を公共のものとして残し、何が活用されるべき史・資料なのかを問う意識は高い。オランダ国立教育博物館では史・資料の収集を出発点と考え、プレゼンテーション・教育・イベント部門に多くの人的・財政的資源を投入している。そして、教育プログラムの開発や他機関との連携により、公共図書館的、教育研究所的な役割に加え、学習素材の提供などを精力的に展開している。この姿は日本の現状、すなわち、利便性の確保にバラつきがあり、また法的規制などにより教育史・資料の収集・保存・活用が必ずしも十分ではない点に対し、その可能性と事例とを示すものである。

キーワード：オランダ／教育博物館／教育史料／保存／活用

## はじめに

オランダ王国ロッテルダム市にあるオランダ国立教育博物館（蘭名：Nationaal Onderwijsmuseum）は、1923年築の元ロッテルダム市立図書館を再利用して1986年に開館した、教育に関する専門博物館である。

図1 オランダ国立教育博物館 HP



※ <http://www.onderwijsmuseum.nl/>（2011年1月5日）

筆者は、文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「往還型教育による学士力の育成」に関わる海外視察で2010年9月14日、同館を訪れる機会を得た。それは、教員養成関係機関を訪問する綿密なスケジュールの合間に設定されており、教育史専攻の若輩者が訪問団に紛れていたことへの先方の配慮であったと推察される。

ロッテルダム市内の中心部にある同館は、小規模ながらいくつかの復元教室を備え、またオランダ教育史にまつわる様々な物品がコンパクトに展示してある教育の専門博物館という印象であった。帰国後にHP（図1）を閲覧したところ、極めて充実した教育プログラムを展開していることがわかった。

しかしながら、開館20数年ほどの小規模館ゆえのことか、オランダ政府観光局のHP<sup>1</sup>では、国立博物館やゴッホ美術館等、代表的な施設のみで同館は紹介されていない。管見の限り日本国内のオランダ関連サイトや書籍、CiNiiなどでも記事を見出すことができなかった。それゆえ、これを機に同館の概要を整理することは、日本でこれまで知られてこなかった教育博物館の姿を知る点

\*すだ まさし 東洋大学文学部教育学科

で、ささやかながら意味ある作業になるのではないかと考えた。これが、本稿執筆に至った理由の一つである。

もう一つの理由に、筆者が拙いながらも感じてきた、史・資料の収集・保存・活用の現状に対する違和感がある。筆者は個人研究や自治体史編纂で学校や公民館など教育機関の資料所在状況を調査する機会があるのだが、そこで「保存年限」を超えた書類廃棄の一般常識化と、それによる資料散逸に直面したことが何度かある。また、個人情報保護法施行後、収集や活用を前提とする調査活動に対し管理責任者の警戒心が強くなり、(不当な)疑念の視線にさらされたこともあった。多忙を極める教育現場にあり、何を公共のものとして保存するのか、とても考える余地がないといった状況である。一方、これらを業務上担うはずの郷土資料館や博物館、図書館、公文書館、自治体史編纂室などでも、資料が未整理であったり、人事異動や編纂事業終了、市町村合併などで状況を把握する者が不在になる例もある。日本博物館協会の統計でも、47%の館園で収蔵庫が「ほぼ満杯」・「入りきらない」状態を抱える一方、資料台帳に「ほとんどすべて」記載は53.2%に留まるという、収集・保存の上で抱える課題が指摘されている<sup>2</sup>。

もとより筆者はアーカイブス論や博物館学、博物館教育の門外漢であり論点が的外れになることを恐れつつも、上述のような日本の現状を、一度オランダの事例に学ぶことで相対化してみたいと考えたのである。

本稿ではまず、日本における「教育博物館」の姿を捉え、次にオランダの博物館における収集・保存・活用に関わる取組や実情を概観する。その上で、個別事例としてオランダ国立教育博物館に焦点を当て、教育史・資料の取り扱いについて考察していきたい。

## 1. 日本における「教育博物館」

### (1) 最初の「教育博物館」

本稿の前提として、日本における「教育博物館」をみておきたい。

椎名仙卓の先行研究によれば、日本における「教育博物館」は1877(明治10)年1月26日、文部大輔田中不二麿の主導により上野山内に開館したものを嚆矢とする<sup>3</sup>。その展示内容は「階下は学校建築の模型、椅子卓子、理化学器械などの学校

で使用する各種の教育に関する資料を展示し、階上は植物、動物、金石の順序に従っていわゆる博物標本といわれるものを展示」していた<sup>4</sup>。これら「資料の収集と展示」の機能に加え、「対外的な教育活動」の機能があり、「理化学器械の紹介幹旋」「標本の貸出」「博物標本の払下げ」を行っていた<sup>5</sup>。椎名は、この背景に、田中が世界初であったトロント教育博物館を視察し、またダビット＝モルレーと親しかった点など海外情報の受容を捉えつつ<sup>6</sup>、「今日みられる教育研究所、教材標本販売会社、それに公共図書館的な性格をも兼ねている博物館であった」<sup>7</sup>とその機能を言い表している。

その後、1881(明治14)年に東京教育博物館と改称、1888(明治21)年に陳列品が教育に関する資料の一部に限定され、翌年には高等師範学校附属となるなど縮小の時代を迎える。1906(明治39)年就任の棚橋源太郎主事(後に館長)時代には展示内容を自然科学系にシフトし、1947(昭和22)年に自然科学に関する調査研究と公開を主眼とする国立科学博物館となり現在に至る<sup>8</sup>。

すなわち日本最初の「教育博物館」は、学校教育の支援を目的とするものから、次第に人々の自然科学に関する学習機会を提供する施設へと変容したといえる。

### (2) 「教育史の遺構・研究情報」から

一方で教育に関する史・資料の収集・保存・活用を担う施設は、郷土資料館や博物館、図書館、公文書館、自治体史編纂室をはじめ全国各地に作られてきた。

2007年に教育史学会が刊行した『教育史研究の最前線』の巻末には、会員からの情報提供をもとにした97の「教育史の遺構・研究情報」が掲載されている<sup>9</sup>。それらを大別すれば、以下の4つに分類できよう。

- 旧藩校・寺子屋や明治以降の校舎を再現・保存した施設
- 教育史・資料を所蔵する資料館・博物館
- 教育史上の偉人を顕彰する記念館
- 教育機関付属の旧校舎・資料

教育史料を収集・保存する一方で観光客も集める長野県松本市の旧開智学校のようなものから、

教育機関付属の旧校舎・資料のように建築そのものの保存が最優先であり、公開性の低いものまで様々である。

公開性の確保に関して、「教育史の遺構・研究情報」で「HPあり」と記されているのは半数の48施設であった。本稿に際し筆者が検索したところ、新たに自治体や管理団体・観光協会などが開設したものや、個人のブログなどを含めるとほぼ全ての施設情報を得ることができた。しかし、玉川大学教育博物館<sup>10</sup>のように随時更新され広報誌の一部がPDFで閲覧できる例がある一方、施設情報を掲載するのみ(更新はほぼ無し)であったり、観光会社や個人による紹介に留まっていたりと、利用を促す工夫には大きな開きがあるのが現状といえる。

## 2. オランダの博物館事情

### (1) 「ミュージウム・カントリー」

日本の外務省が2010年11月現在でまとめたところによれば、オランダの人口は1653万人(2009年オランダ中央統計局)、面積は41,864 km<sup>2</sup>である<sup>11</sup>。オランダ人自身が「自分の国のことを、よくミュージウム・カントリーと呼び」、「国民一人あたりの博物館密度が世界一高い」と言うように、九州ほどの国土に博物館(この範疇には美術館も含む)が集中して存在する<sup>12</sup>。

以下、カトリーヌ・バレ、ドミニク・プーロ著松本栄寿、小浜清子訳『ヨーロッパの博物館』により近年の概要を整理していく。

オランダ中央統計局の定義「一つまたは複数のコレクションをもつ施設で、大部分が常時公開されていて、定時間帯に(要望による場合もあるが)訪問できること。入場は有料または無料」によれば、1997年の博物館数は944で「過去数十年間

の博物館の爆発的増加は、専門家の注目を集めている」という<sup>13</sup>。

表1は、そのうち美術館よりも博物館の増加傾向を示すデータである。来館者数も増え続け、1950年には260万人であったが1990年には2200万人になったという<sup>14</sup>。1997年における博物館のテーマ別分類と来館者割合は表2のようになる。

またオランダ国内の博物館密集地帯は国の西部と中部であり、12%はアムステルダム、ロッテルダム、ハーグにある<sup>15</sup>。ロッテルダム市にある歴史系のオランダ国立教育博物館は、博物館数の多い地域にあるポピュラーな部類の博物館の一つといえる。

### (2) 文化政策の展開と博物館事情

こうした博物館数と観客数の増加は、オランダにおける文化政策が背景にある。既に、第二次世界大戦後の1947年にオランダは以下のような文化政策を掲げている<sup>16</sup>。

- 現代の世代と後世のために、国の文化遺産を保存し、維持し、可能な限りその範囲を広げる。
- 文化遺産の公開や、より多くの人々を対象とする文化の発展を促進し、創造活動と芸術の喜びを支援する(オーケストラや劇団を支援して)。
- 青年や成人が芸術に触れる機会を増やす(青年や労働者の芸術的感性を豊かにするために)。
- アーティストを支援して芸術の発展に協力する(才能ある若者の養成、賞金、奨学金、公共の建物の内装をアーティストに注文するなどによって)。
- 国威発揚と国際地位の向上のため、オランダの文化的発展を海外に広く紹介する。
- 国の支援なしには実現しえないような大規模な

表1 オランダにおける博物館数

年	博物館数	その他の博物館割合	美術館割合
1900年以前	42	52%	48%
1990年 (割合は1985～88年)	714	85%	15%
1997年	944	89%	11%

※『ヨーロッパの博物館』、78～79頁から作成。

表2 オランダの博物館別・来館者割合

分類	分類の割合	来館者割合
歴史・考古学博物館	52%	30%
科学技術博物館	28%	20%
美術館	11%	17%
自然史博物館	5%	10%
民俗学博物館	2%	2%
その他	2%	—

※『ヨーロッパの博物館』、79、83頁から作成。

文化プロジェクトを企画し、出資し、支援する(オーケストラ、劇団、オペラ、展示会、絵画)。

ここに文化遺産の保存・収集と、これらを基礎とした積極的な活動の展開が示されている。

1970～80年代、オランダでは中央政府に博物館局が設置され、博物館は人々に奉仕すべきであることを主張した改革が進められた。これにより「博物館の教育部門は変化し、機能も多様化し」、「ついで広報のほうが優遇されるようになった」という<sup>17</sup>。こうしてサービス向上に努めた結果、1990年には2200万人の来館者となった。

1990年代には、地方分権と民営化の時代を迎える。オランダには12の州があるが「地方分権の原則にのっとって、文化部門の内容は地方レベルで充実したものとなり、権限の委譲が行われ」<sup>18</sup>た。その一方で「人口一万人以下の小規模自治体は削減していく方針が政府によって打ち出され」、「1851年に1209あったのが、95年に633とほぼ半減し現在489にまで減って」<sup>19</sup>いる。これら権限委譲と市町村合併によって進められた地方分権化により、オランダでは表3にみられるように、文化活動に対する予算を次第に中央政府から州や地方自治体が担う形に変化してきている。

政府は2001～2004年の「文化四か年計画」で「博物館と無縁の社会階層に対して働きかけを強化しなければならない」ことを強調しているが、この「質、自治、収益性」をキーワードとする改革により、国立博物館に自治が与えられ一部民営化されるなど、市場原理が大幅に導入されている<sup>20</sup>。

一方で、オランダは元来民間博物館が多いのが特徴で、1997年段階で日本の博物館が国公立75.6%、公益法人・会社個人24.4%<sup>21</sup>であるのに対し、オランダでは公共博物館(国営、州立、市町村立)19%で、財団、協会、企業、個人経営の博物館が79%も存在する(2%はその他)<sup>22</sup>。これ

ら、民間博物館には多くの公的補助金が投入されているが、政府の求める「質、自治、収益性」のような基準を満たさなければならない。

オランダでは1997年段階で6485人(4043人が常勤、1138人がパート)とボランティア3180人がいたが、「質、自治、収益性」の重視はスタッフの機能にも反映している。典型的な博物館を例にとれば、最も比重が高いのが来館者対応で46%、次にコレクション22%、技術的任務18%、管理14%になるという<sup>23</sup>。これら1990年代以降のオランダにおける博物館政策を『ヨーロッパの博物館』では以下のようにまとめている<sup>24</sup>。

博物館の発展、多様化、近代化、展示の増加、観客へのサービスの向上などが実を結び、来館者の数は大幅に増加した。博物館のプログラムは、需要と供給の面で変化していった。

これは、本稿で扱うオランダ国立教育博物館を取り巻く状況を端的に示すものといえる。つまり、教育史・資料と無縁であった人々に向けた教育プログラムを開発し、来館者数の増加を図る事業展開に努力している、そんな同館の姿が浮かび上がってくるのである。

### 3. オランダ国立教育博物館の組織概要

#### (1) 目的と運営組織

では、オランダ国立教育博物館の組織概要を捉えていきたい。図2、3は館内で配布されるリーフレットだが、ここに記されている概要をもとに、同館では充実したサイトを運営しており、事業内容が詳しく紹介されるとともに、さらに2008年度と2009年度の年次報告書をPDFで公開している<sup>25</sup>。以下、2009年度版の年次報告書『Het Nationaal Onderwijsmuseum In 2009』に基づき、同館の概要をみていきたい。

その冒頭には、以下のように記されている。

Het Nationaal Onderwijsmuseum werkt aan het verbeelden, duiden en beleven van ons onderwijs in verleden en heden.

De activiteiten van het museum bereiken een breed publiek door heel Nederland en zijn gericht op interactie en het delen van kennis. Ze vormen een aanknopingspunt voor actuele

表3 文化活動の予算配分(%)

年	中央政府	州	地方自治体
1975	40	6	54
1985	44	5	51
1999	32	9	58

※『ヨーロッパの博物館』、75頁。

discussies over onderwijs en onderstrepen het belang van goed onderwijs in onze samenleving.

ここには、オランダ国立教育博物館が、オランダの教育史実や現在の教育問題を取り扱い、人々に向けて広く知識や認識の共有や最新の教育論議を考えるきっかけを与えるために活動を展開していることが述べられている。

運営組織として、管理者（1名）、事務員（5名）、そして主要2部門としてプレゼンテーション・教育・イベント部門（6名）と収集・研究部門（8名）が存在する。前者は、展示ツアーを担うほか、常設展や企画展、教育プロジェクト等を開発し、博物館の商業活動や広報活動を担い、フェスティバルへの参加や、研究会、シンポジウム、討論会を単独または他機関と連携して開催するなど各種事業に取り組んでいる。後者（収集・研究部門）は、

収蔵品の登録管理や博物館のライブラリを担当している。この部門は研究を進め、収蔵品を用いた展示会の企画や展示を開発する事業にも取り組んでいる。

同館にはロッテルダム市や教育文化科学省からの出向職員、そして短期雇用者やボランティアなど総勢は40名ほどがいる。2009年の常勤・パートを合わせた常勤相当換算のFTE（full-time equivalents）は15.1である。この他、実習生やインターンなども受け入れている。

図4の組織図から収集・研究部門でも一般向けの図書室運営を担っており、これとプレゼンテーション・教育・イベント部門を合わせれば、教育史・資料の活用面にかなり手厚くスタッフが配置されていることがわかる（その事業内容は次節で詳述）。

図2 オランダ国立教育博物館リーフレット表紙面（筆者蔵）



図3 オランダ国立教育博物館リーフレット（図2の裏側）



(2) 財務状況

表4から、オランダ国立教育博物館の収入は政府(€601,526)とロッテルダム市(€405,000)の補助金を中心としていることがわかる。これに次ぐのが入館料やレンタル収入などの商業収益(€137,893)である。この他、積極的にプロジェクト補助金などの外部資金を獲得している。

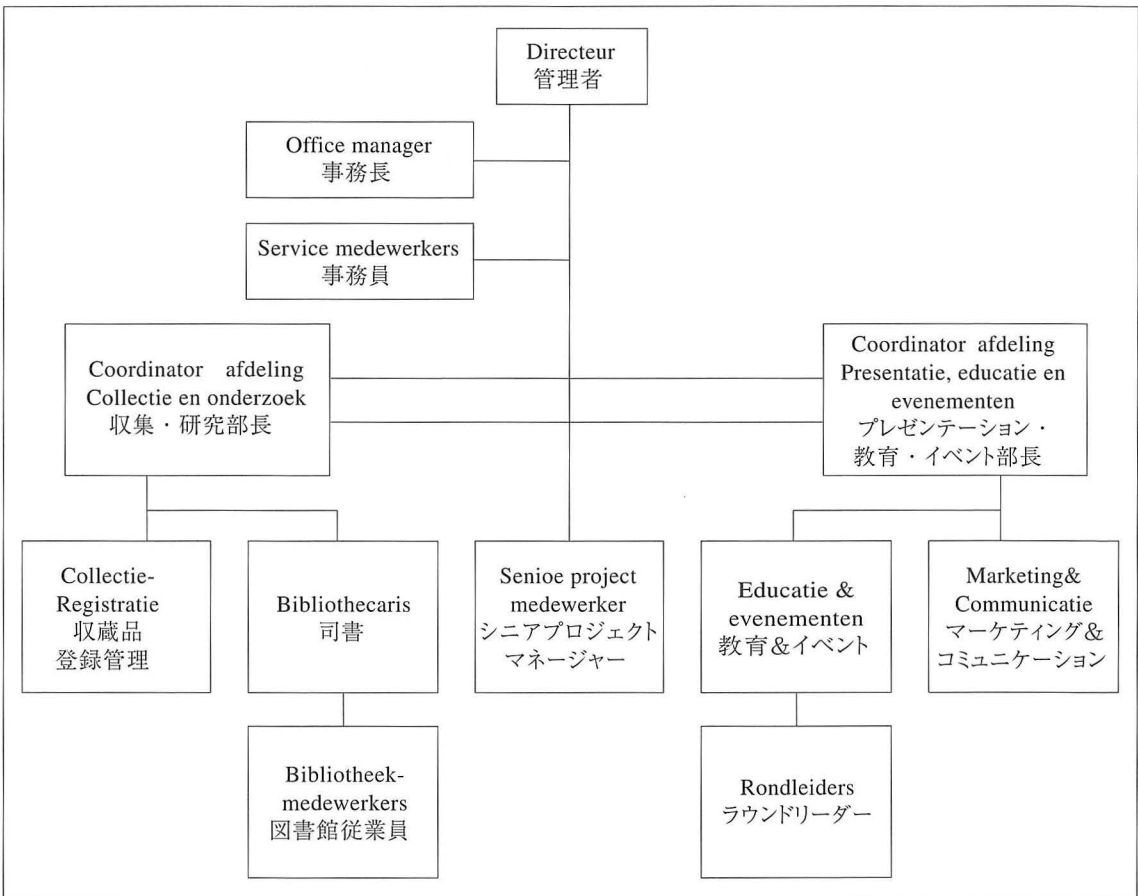
支出面では実用費が€1,032,237であり、政府・ロッテルダム市からの補助金は、ほぼこれら維持管理に充当していることがわかる。一方、活動費に着目するとその6割強をプレゼンテーションが占め、これに教育を加えれば、プレゼンテーション・教育・イベント部門が収集・研究部門よりかなり多額の資金を投入して運営されていることわかる。ここからも教育史・資料の活用面を重視していることは明らかである。

表4 収支決算表(2009年)

収入(ユーロ)	支出(ユーロ)
入館料および店舗収入 25,552	実用費 人件費 707,235
部屋のレンタル収入 72,587	建物維持費 118,510
レンタル収入 33,442	一般的実用費 179,192
展示と画像ツアーの収入 6312	減価償却費 27,420
政府補助金 601,526	総営業費用 1,032,237
ロッテルダム市の補助金 405,000	活動費
プロジェクト補助金 107,436	販売と通信 99,992
金融収益 3735	収集 55,520
	プレゼンテーション 307,330
	教育 24,152
	総活動費 486,994
総収入 1,255,590	総支出 1,519,351
収支差額	-263,761
営業実績	-516

※『Het Nationaal Onderwijsmuseum In 2009』、57頁。

図4 オランダ国立教育博物館組織図



※『Het Nationaal Onderwijsmuseum In 2009』、51頁参照

詳しくは次節で述べるが、同館ではコレクションの取得や収蔵品のデジタル化、教育プロジェクト、博物館展示や館内整備など多様な事業に取り組み、それだけに出費を要している。表4では赤字決算であるが、年次報告書では、独立採算性は増しており今後数年間で自己資金を作り出せる、と述べられている。

### (3) 入館者数

この見通しを裏づけているのは、入館者数の増加にある。近年のオランダが「質、自治、収益性」を重視する博物館政策を掲げているのは前述のとおりだが、図5の入館者数の推移から、同館が1990年代以降2003年まで入館者数の低迷期を経験しつつも、それ以後現在まで入館者数を増加に転じさせてきていることを捉えることができる。特に2009年は前年比5000人増となる42454人の訪問者を迎え、初の4万人突破となっている。

同館の開館と入館料は以下の通りである<sup>26</sup>。

#### 開館日・営業時間

火曜日から土曜日	10:00 - 17:00
日曜日	11:00 - 17:00
月曜日 (学校休業期間中のみ)	10:00 - 17:00
定休日: 毎月曜日、1月1日、4月30日、 12月25日	

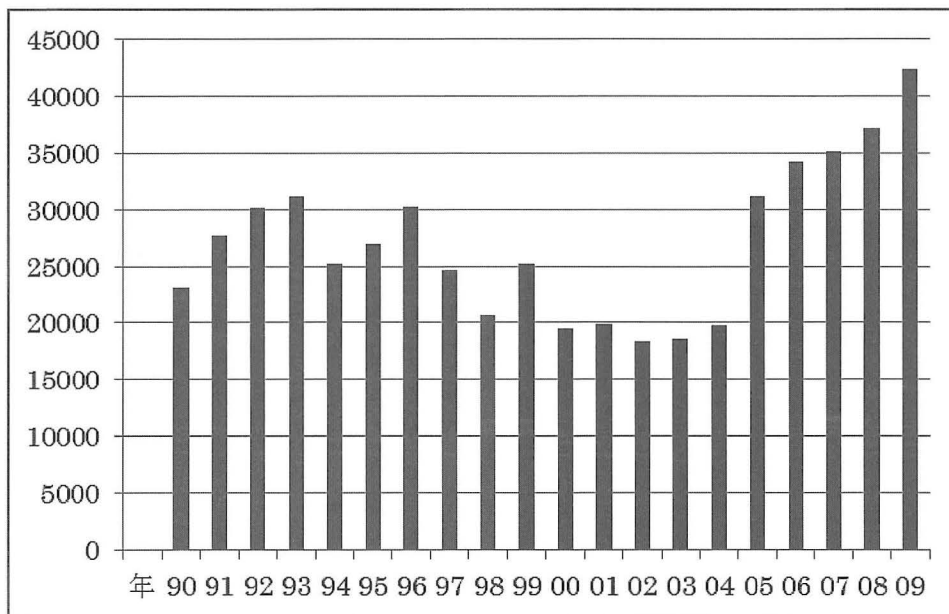
#### 入場料

大人	€5
12歳までの子ども	無料
16歳までの若者 / 学生 / 65歳以上	€2
Museumkaart & Rotterdampas	無料

定休日の4月30日はベアトリクス女王誕生日、入館料のMuseumkaart & Rotterdampasはいわばフリーチケットのことである。開館日・営業時間や12歳以下無料、学生・高齢者割引など、日本とほぼ同様な営業スタイルである。

年次報告書によれば、69%は初めて当館を訪れる人であり、訪問者の38%は特別展に来ていた。2009年のほとんどの訪問者は27歳以上で、37%が50～64歳であったという。いわば、様々な特別展やイベント開催により、幅広い入館者層の獲得に成功したことが初の4万人突破を導いた要因

図5 オランダ国立教育博物館の来館者数の推移



※ 『Het Nationaal Onderwijsmuseum In 2009』、11 頁から作成

と述べられている。

#### 4. オランダ国立教育博物館の事業展開

##### (1) 収集・研究部門の事業

前節でみたように、オランダ国立教育博物館では事業展開を担う2つの主要部門があった。まずは、資料の保存・収集に関わる収集・研究部門の事業を概観し、次に活用面を担うプレゼンテーション・教育・イベント部門を見ていきたい。

同館では、オランダ教育の傾向や特徴に関する収集・調査・公開の活動に努める方針のもと、オランダ国内と植民地における教育史・資料を収集している。具体的には、教科書などの書籍や視聴覚教材、文房具、教具等膨大なコレクションを主としており、この他ほとんど毎週のように絵、服飾、日記や手紙のような個人的な性格の物品、教科書、本など寄贈も受け入れているという。また、同館の収蔵品には高価な画像も含んでいる。それは印刷物、ステレオ写真、フィルム、写真そして教育用スライドなどであり、研究者やジャーナリスト、学芸員、雑誌編集者、出版社らがそれらを用いるなど、高い需要があるという。

しかし一方で、収蔵物の移転が模索されている。1923年に建てられた建物は、記念碑的な価値があるものの収蔵庫が手狭になり、もはや十分な収蔵・管理に耐えられなくなっている。そのため小規模な回収が行われているが、さらなる実用性を求めて地元市議員と何度か議論を行っているという。収蔵庫のスペース不足では、日本の博物館と同様の課題を抱えているといえる。

図6 収蔵庫の写真



<http://www.onderwijsmuseum.nl/collectie> (2011年1月5日)

また、教育史・資料活用の利便性向上に関わって、デジタルアーカイブス化を進めている。2008年以降、オランダの博物館所蔵資料の登録システムである The Museum System (TMS) に3101点を登録し、2009年には、少なくとも上半期までに1410点を登録したという。ここには、前述の高い需要があるという画像資料も多数含まれている。日本の博物館でも近年データベース化が「急速に進展」しており、電子化された「資料台帳」をもつ館は42.6%、そのうち「ほとんどすべて」が入力済みは45.7%である<sup>27</sup>。データベース化の過渡期にある点では同様であるが、相互ネットワーク化にも取り組んでいる点が日本と異なる点といえよう。

収集・研究部門では図書室も運営しており、オランダ教育史に関する収蔵品に加え、特に教授法に関わる貴重書を公開している。図書館は月曜から金曜の9時から17時まで利用でき、2009年にはそれ以前の8年間を上回る122人の来館者があり、学生、ジャーナリスト、科学者、写真家そして児童期・思春期の教科書に興味をもつ人々などが利用したという。これら教育史・資料に関心のある利用者対応の一環として、様々な質問への回答、いわゆるリファレンス業務も行っており、2009年には「古い学校」、「学校の備品」、「19世紀の読み教育について」など234の質問に答えている(2008年は189)。

以上のように、収集・研究部門では収集・保存に留まらず収蔵品の公開やリファレンス業務にも力を入れていることがわかる。年次報告書には、「De collectie van het museum vormt hierbij het uitgangspunt」(8頁)、すなわち「博物館の収集物は出発点」と述べられており、次いで視覚的または有用性のある資料が増えることで博物館事業の範囲が広がるとも述べられている。これは、日本最初の教育博物館が備えていた「教育研究所」と「公共図書館」の機能を兼ね備えた姿と重なる。収蔵品を知る者が活用の方途を考える、という点で望ましい在り方といえる。

##### (2) 常設展

次にプレゼンテーション・教育・イベント部門の事業内容である。まず、常設展であるが、その展示内容は大きく3つに分類できる。一つ目は復元教室で、17世紀の修道院学校、1910年代、



1930年代、1960年代など6つの教室があり、実際に机に座ることができる。また、壁面には各時代に使われていた教材・教具も展示されている。二つ目は、オランダで読み・書き・算の習得に一般的に用いられてきた教材・教具の展示である。三つ目は、オランダにも広く親しまれてきたヨーロッパの教育思想家・実践家に関する展示である。フレーベルの恩物やモンテッソーリ法で用いられた教材・教具のほか、その基本的な考え方を紹介するパネルが展示されている。

常設展を用いて、初等教育、中等教育、成人向けの3つの教育プログラムが用意されている。代表的なものはガイド付きの「ツアー」（有料）であろう。6つの復元教室をめぐり、1930年代の教室では、ディップペンでの書き方体験、読書、歌、絵を描いたり算術をしたりと、当時の教育を追体験することができる。主要なターゲットは特に地域の学校（365団体）と若年者、そして「博物館友の会」に入っている現役または元教師（108団体）である。2009年には732の小学校の団体訪問があったが、その多くはこれを体験している。また、2009年に同館では9人の新しいガイドを採用し、総勢21人体制であらゆる層の客に対応しているという。

この他、「マインドマッピング（絵や図の情報を用いて記憶を構造化する技法）」を用いた「ツアー」も積極的に行っている。これはイギリスのトニー・ブサンが提唱する「マインドマップ」を用い、教育史に関連する事柄を連想させながら、

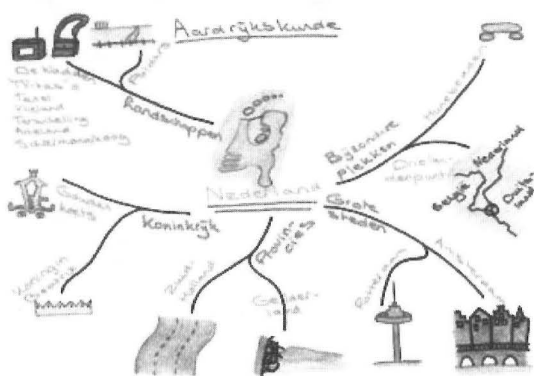
異なる時代の学校や教育の様子への関心を高める技法である。このツアーでは、最終的に複数の参加者たちが学んだ情報を共有する形をとる。学習者の主体性を引き出し、学び合いや資料への認識を深める点で、趣向の凝らされた教育プログラムといえる。ここに、この部門に多くの予算と豊富な人員を充当している同館運営の特徴を捉えることができる。

### (3) 企画展と様々な教育プログラム

年次報告書では、「他の文化的、教育的、社会的組織との連携を通して、博物館はその垣根を越え、より幅広い観客のために新しいプロジェクトを展開している」ことが述べられており、同館では数か月に一回企画展を開催している。以下は、2009年の一例である。

- ベアトリックス女王の児童期に関する企画展「プリンセスも学校にいった」（2008年8月22日から2009年1月4日）
- 学校の映写機に映された教育映画の発展に関する企画展「百年の教育映画」（2008年12月11日から2009年9月6日）
- 「サルから人へ、教育の進化論」展（2009年2月19日から4月12日）
- 「オランダの職業教育」展（2009年6月19日から2010年9月11日）
- 学校史に関する最高級のアーカイブ展「Old Gold」（2009年6月、常設展化）
- Annie van Gemertの写真展「少年と少女」（2009年9月4日から2010年1月3日）

図7 公式HP内のマインドマップの写真



[http://www.onderwijsmuseum.nl/basisonderwijs/mindmappen\\_slimme\\_zet](http://www.onderwijsmuseum.nl/basisonderwijs/mindmappen_slimme_zet)  
(2011年1月5日)

これら企画展は、公式HPで情報が掲載されるほか、「プリンセスも学校にいった」展などは出版物（いわゆる図録）刊行など、日本と同様に（それ以上に精力的な）広報・出版活動を伴っている。

他機関との連携例として、ロッテルダムの5つの文化施設の協力による企画展「ロッテルダムのくつろぎ」を挙げることができる。これは、オランダの歴史と文化を発見し、ロッテルダム市への愛着を高めようとする教育プログラムである。年次報告書には明言されていないが、筆者はロッテルダムの街中でアジア系・アフリカ系・イスラム系など様々な人種が往来するのを見た。これら異なる民族や文化を背景にもつ人々がいかに共生す

るのかについて、現地の教育関係者も高い関心を寄せていた。同企画展の背景には、こうしたロッテルダム市（オランダ）が抱える多民族社会という現状があるのは間違いない。オランダ国立教育博物館では、これに協賛して近代オランダ教育制度の歩みと、昔の子どもたちがどんな学校に通っていたのかを知ることができる展示を行った。合計120人の子どもたちが来たという。

この他、黒板、教室の写真、教科書、教材、ノートなどを国立博物館やロッテルダムのオランダ写真博物館、ロッテルダム図書館など22の博物館や機関に貸し出す事業が行われている。一方、アムステルダムの聖書博物館が開催した若者と宗教との関係を考える「Inside Out-Youth and Religion」展の展示会を同館でも開催するなど、単独館ではなし得ない企画や展示を実現している。

これら企画展毎に講演会やワークショップを行っている。例えば、「百年の教育映画」展ではサイレント映画に自分たちで音を吹き込む2時間半のワークショップ「3, 2, 1 ... Action!」が行われ、6団体149人の生徒が参加した。ワークショップはこの休日の活動として、4歳から12歳を対象に常に行われている。2009年の活動は以下の通りであり、合計3101人が参加したという。

春：ウインドウハンガーづくり、2度目は「マジックランタン」パフォーマンス  
 休日：古いオランダの遊び  
 夏：DVDケースのデザイン  
 秋：夢の家のデザインと製作  
 クリスマス：指人形づくり

さらに公式HPで収蔵品をもとにしたオランダ教育の歴史に関わる文書や画像が無料でダウンロードできるようになっている<sup>28</sup>。これは例えば、学校教員が歴史教育の教材を作成したりする際に利用できるものであり、学習素材の提供事業として注目すべき事業といえる。

#### (4) プラットフォームとしての博物館

オランダ国立教育博物館では、展示企画に加えて教育や芸術に関する団体に部屋をレンタルするなど、イベント開催の便宜を図っている。旧図書館の雰囲気を残す部屋が、街の真ん中という好立地と相まって好評だという。2009年には、4つの

部屋が299回貸し出され、6269名が利用した。

同館ではロッテルダム市内のエラスムス大学や近郊の高等教育機関、それに学術機関などと連携しており、展覧会やイベントを開催している。ベルギーオランダ教育史教育協会（Belgisch Nederlandse Vereniging voor de Geschiedenis van Opvoeding & Onderwijs: 略称BNVGOO）との連携では、教育史国際常任委員会議（ICAL）がロッテルダムのエラスムス大学で開かれた際、レセプション会場を提供し、出席者に常設展の「ツアー」を行った。また、デンマークのWurzburg大学（教育史研究室）および学校博物館との連携では、2007 - 2013年の間取り組まれている文化プログラムの一端を同館が担っているほか、Wurzburg大学が2009年4月2～3日に開いた国際会議の場所を提供した。

これら国内外の学術・教育機関と連携し、研究交流の一拠点を担うとともに、広報誌の刊行にも力を入れている。広報誌『LESSONS』は発行部数500で年4回刊行し、公式HPからもダウンロードが可能である<sup>29</sup>。編集方針として「De redactie zorgt voor boeiende historische en actuele artikelen」、すなわち「魅力ある教育史と現代の教育を扱うこと」を掲げており、オランダ教育史に関わる記事と、各国の博物館・教育施設のレポート、同館の事業に関する情報によって紙面が構成されている。2010年3月、6月、9月のオランダ教育史の記事から一例を挙げれば、以下のようなものがあった。

2010年3月

- Jan Amos Comenius: onderwijsvernieuwer-M. Rietveld van Wingerden  
(コメニウス：教育改革者)
- Comenius en Montessori: het kind centraal-Fred Kelpin  
(コメニウスとモンテッソーリ：児童中心)

2010年6月

- Hoe de Broeders van Maastricht kinderen leerden lezen - M. Remery  
(マーストリヒトの兄弟の読み方学習法)

2010年9月

- Stadsarmenschole in de achttiende eeuw-D. van Gijlswijk  
(18世紀の都市貧民学校)

- Opvoeden in de Oost. De Koloniale School voor Meisjes en Vrouwen - M. Kroonen  
(東アジアの教育：植民地の女子教育)

これはほんの一例であるが、オランダに所縁のある教育思想家、地域教育史、植民地教育史など多様な記事を見出すことができた。どの紙面も美術面で工夫が凝らされており、また写真も多用され記事に関する具体的なイメージを深めやすくなっている。

この他、同館には「友の会」があり、『LESSONS』はその会員や機関に配布されるほか、各号の主題に添った講演会を開催するなど、出版と文化活動を連動させ、教育史・資料の活用の一場面として、教育史研究の普及・振興を図っている。日本の博物館で「友の会」があるのは22.2%に留まり、「必ずしも充実・進展してきているとはいえない」状況にある<sup>30</sup>。ここにも、同館の精力的な活動の一側面を捉えることができる。

## おわりに

帰国後、今回の訪問をコーディネートして下さったオランダの方々と同館について尋ねたところ、同様の事業は多くの博物館・図書館が行っており、同館はむしろ特定の層を対象としたささやかな存在だという話があった。「ミュージウム・カントリー」オランダにおいて「質、自治、収益性」の向上を掲げる方向を1000近い博物館、そして本館と分館を合わせて約1150ある図書館<sup>31</sup>が追究している。それを考えれば、同館は実際に目立たない存在なのだろう。

しかし、本稿がこれまで整理してきた事業展開は、教育史・資料を収集・保存し、幅広い層に自国の学校教育や教育の歩みに関わる知識・認識を還元しようとする努力に貫かれた、極めて精力的なものであった。特に注目すべきは、史・資料の収集は出発点と考え、そこから数々の事業を展開している点ではないだろうか。その姿は市場原理導入という政策の荒波を強く受けている。しかし一方で、荒波を乗り切ろうとする小さな博物館の姿に、何が公共のものとして保存する価値があり、何が活用されるべきなのか、という史・資料の取り扱いをめぐる問いの深まりを見出すこともできる。その結果導き出された教育博物館の機能とは、教育研究所的、公共図書館的なものであり、さら

には収蔵品の貸出やデジタルアーカイブ化といった学習素材の提供を推進していくものであった。それは奇しくも、日本における最初の教育博物館の姿に類似してもいるのである。

日本でも1990年代以降同様に、規制緩和・市場原理導入の改革が行われており、「総合的な学習の時間」による博学連携への関心が高まったことも相まって、博物館における体験学習や教育プロジェクトが重視されている<sup>32</sup>。この動向そのものは今後も注目に値するものとしても、冒頭に述べたように法的規制や人事異動などの外発的要因により実践の基盤は不安定と言わざるを得ない。オランダから学ぶべきは、何を公共のものとして保存し、どのように人々に還元していくのか、という課題意識を広く共有していくことではないだろうか。この問いは、いかに豊かな視点で明日の生活を切り開く主体を形成するのか、というきわめて教育的な問いにつながっている。ならば、学芸員・司書のみならず社会教育主事や学校教員、研究者もまた、史・資料の収集・保存・活用の議論に参加していくべきであろう。例えば研究者がコーディネート役をつとめ、学芸員・社会教育主事・学校教員が自機関所蔵資料の保存・活用の現実の方策を話し合うなどの取り組みが考えられる。これら協働体制の構築は、学校や博物館・図書館の社会的使命を再考するきっかけになり得るのではないか。

オランダは現在でも多民族・多文化社会だが、一昔前までは「柱状社会」と言われ異なる民族・文化・宗教の交わらない社会であった。それゆえに何を公共のものとし、いかに互いに交流するのかに敏感な社会的・文化的土壌がある。これに対し日本では民族の違いや文化の違いが問題化することは稀であり、むしろ経済発展など異なる課題に関心が向けられてきた。しかし、高齢化・少子化・過疎化・地域社会の崩壊などが社会現象化するなか、オランダとは異なる経路を辿りつつも、全く同じ問いを立てる必要性が増している。このデリケートで、しかし今後の歴史（教育史）研究と歴史認識の質に関わってくる問題に対し、本稿は実例をもって考える素材を提示したものと考えている。

本稿は、文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「往還型

教育による学士力の育成」プロジェクトによる海外視察により得た情報をもとに、帰国後の調査を加えてまとめたものである。今回の訪問をコーディネートして下さったロッテルダム大学のGerard M. Reitsma氏と井上富美子氏に厚く感謝申し上げます。

- 1 オランダ政府観光局 <http://www.holland.or.jp/nbtc/index.html> (2011年1月5日)
- 2 財団法人日本博物館協会『日本の博物館総合調査研究報告書 平成20年度』、2009年3月、85～86頁
- 3 椎名仙卓『日本博物館発達史』雄山閣出版、1988年、41～49頁
- 4 同前、47頁
- 5 同前、100～102頁
- 6 これら海外の教育博物館情報の受容に関しては、近年相次いで精緻な研究成果が出されている。溝上智恵子「教育博物館誕生一万博における日加の出会い―」(日本カナダ学会『カナダ研究年報』第27巻、2007年、19～33頁)や高田麻美「田中不二磨による教育博物館情報の摂取」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』第53号、2010年、21～35頁)。
- 7 前掲、椎名『日本博物館発達史』、320頁
- 8 同前、320～338頁
- 9 教育史学会50周年記念出版編集委員会『教育史研究の最前線』日本図書センター、2007年、317～345頁。その他、津山科学教育博物館や川崎医科大学現代医学教育博物館のような特定分野の教育を目的とした博物館などがあるが、これらは本稿で扱う教育の専門博物館とは区別すべきであろう。
- 10 玉川大学教育博物館 <http://www.tamagawa.jp/research/museum/index.html> (2011年1月5日)
- 11 外務省ホームページ「各国・地域情報」参照 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/netherlands/data.html> (2011年1月5日)
- 12 芦塚隆「オランダの博物館・美術館」(『博物館研究』第21巻第8号、1986年、23頁)。カトリクス・バレ、ドミニク・プーロ著松本栄寿、小浜清子訳『ヨーロッパの博物館』雄松堂、2007年、68頁
- 13 前掲、『ヨーロッパの博物館』、76～78頁
- 14 同前、82頁
- 15 同前、79～80頁
- 16 同前、72頁。Fenger, P Government and Arts : the Netherlands in M.commings et R. Katz (eds.) , The Patron state, New York, Oxford University Press,1987,p105
- 17 前掲、『ヨーロッパの博物館』、72～73、82頁
- 18 同前、74頁
- 19 組腹洋、西川馨「歴史と現状」(西川馨編『オランダ・ベルギーの図書館』教育史料出版会、2004年、184頁)
- 20 前掲、『ヨーロッパの博物館』、75頁。Privatization and Culture,P.Boorsma,A.van Hemel,N.van der Wielen (eds.) , Dordrecht,Kluwer Academic Publishers,1998.
- 21 前掲、『日本の博物館総合調査研究報告書 平成20年度』、9頁、図表4「設置者別構成」より算出
- 22 前掲、『ヨーロッパの博物館』、79頁  
Museums in the Netherlands Facts and figures,Amsterdam,ICOM-Netherlands,1997,p.7 .
- 23 前掲、『ヨーロッパの博物館』、80頁。前掲、Museums in the Netherlands Facts and figures,p.14.
- 24 前掲、『ヨーロッパの博物館』、81頁
- 25 本稿では、オランダ国立教育博物館のHPでダウンロードできる年次報告書『Het Nationaal Onderwijsmuseum In 2009』のオランダ語をgoogle翻訳(<http://translate.google.co.jp/>)で英語に変換し、それを読み解く作業を基礎としている。概要把握を優先させたため、必ずしも精読を試みてはいない点を了承願いたい。なお、特に断りのない限り、3～4の内容はここからの引用とする。
- 26 <http://www.onderwijsmuseum.nl/museum> (2011年1月5日)
- 27 前掲、『日本の博物館総合調査研究報告書 平成20年度』、87頁
- 28 <http://www.onderwijsmuseum.nl/educatie/lessuggesties> (2011年1月5日)
- 29 <http://www.onderwijsmuseum.nl/vrienden/lessen> (2011年1月5日)
- 30 前掲、『日本の博物館総合調査研究報告書 平成20年度』、103～105頁
- 31 前掲、『オランダ・ベルギーの図書館』、11頁

- 32 国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か 歴史博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来』アム・プロモーション、2003年など。

